



# 京大広報

No. 622

2007. 4



湯川記念館中庭の桜

## 目次

課外活動施設の建設に向けて  
教育・学生担当理事・副学長 東山紘久……2350

〈大学の動き〉  
副学長、機構長が発令される……2352  
部局長の交替等……2352  
平成18年度第2回京都大学総長賞表彰式……2356

〈部局の動き〉  
「先端領域融合医学研究機構」終了シンポジウムを  
開催 ……2357  
「京都からの提言：21世紀の日本を考える(第2回)」  
を開催 ……2357  
寄附講座、寄附研究部門の設置、更新……2358

〈寸言〉  
世界で通用するトップブランド 秋山咲恵……2362

〈随想〉  
技と楽しみ 名誉教授 上野民夫……2363

## 〈洛書〉

京都と京都大学に纏わる鼠の話 芹川忠夫……2364

## 〈話題〉

Wood Science Schoolおよび第69回生存圏  
シンポジウムを開催 ……2365  
第3回「TOKYO 漢籍 SEMINAR」を開催 ……2365  
「京都大学環境報告書2006」が環境配慮促進法  
特定事業者賞を受賞 ……2366

## 〈資料〉

平成18年度総長裁量経費による研究課題……2366

## 〈訃報〉

……2368

## 〈日誌〉

……2369

## 〈お知らせ〉

文部科学省特定領域研究「持続可能な発展の重層的  
環境ガバナンス」第1回国際シンポジウム……2370

〈隔地施設紹介〉  
農学研究科附属牧場……2371

京都大学広報センター

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 課外活動施設の建設に向けて

教育・学生担当理事・副学長 東山 紘久

京都大学は運動サークル、文化サークルともに活発な活動をみせている大学です。昔はオリンピックの金メダリストを輩出した伝統さえ持っています。しかしながら、学生たちの活動に比べて施設特にクラブボックスは貧弱の限りです。公認サークルでもボックスがないクラブがかなり存在します。大学における課外活動は、青春期の学生にとって大切な教育の一つです。課外活動は、人生の幅を広げ、友達を作り、社会的なルールの獲得や心身の鍛錬になっています。また、課外活動施設建替えは、全人教育を目指す本学の中期計画に掲げられている「課外活動施設や福利厚生施設を計画的に整備し、学生の学習意欲を喚起するキャンパス環境の改善に努める。」とされている計画の1つです。

今回、大学と学生との間で西部構内に課外活動施設(クラブボックス棟)を建設することについて合意が成立し工事中が待たれます。この建設経費は、総長が理事と相談しながら重点事業を策定し実施していくための「京都大学重点事業アクションプラン2006～2009」のなかの目的積立金で行います。

以下に、課外活動施設の建設についての経緯を纏めてみます。

- ・昭63.9 西部構内の東サークル棟が焼失。当該サークル棟の団体は、東南アジア研究センター等に移転(現在に至る)
- ・平6.2 課外活動施設建替えの検討を開始
- ・平6.5 サークル代表に課外活動施設建替えの予算要求について説明



- ・平6.9～7.1 サークル団体への説明会を4回開催
- ・平6.12 学生部委員会で課外活動施設の原案(西部構内に7棟2階建て分棟方式および文化ホール(仮称))を了承
- ・平7.1～7.11 学生(ボックス連合、個別団体他)から要求書等の提出
- ・平7.12～8.6 ボックス連合との話し合いを3回開催
- ・平8.10 吉田南構内の京都大学音楽部交響楽団、ALL京都大学舞踏研究会の部室焼失
- ・平9.5 ボックス連合との話し合い以後、平14.10まで話し合い中断
- ・平14.10 京都大学の中期計画『課外活動施設の整備の目的及び条件』、『課外活動関係施設整備計画』、『課外活動共用施設』を学生に説明
- ・平14.12 尾池副学長(当時)とB連代表者との面談(注：B連とは、ボックス連合の略称で50サークルが参加)
- ・平15.6～15.10 学生部委員会第二小委員会とB連との話し合いを9回開催  
平15.10 学生部委員会第二小委員会とB連との合意事項を学生部委員会で承認
- ・平16.1 東山副学長とB連との面談
- ・平16.7.29 東山副学長が学生と西部構内の課外活動施設整備に係る話し合いを開催  
今後の課外活動関係施設の整備と運用について、次の事項を確約
  1. 学生が自主性を発揮できるように、「予防的な規制」よりは「事後的な対処」を施設運用上の基本方針とする。
  2. 学生の要求する、十分な施設規模・設備・整備維持予算の確保に最大限努める。
  3. 施設整備の移行期において、着工前の課外活動を喪失するサークル・クラブに対しては、それまでの活動が維持できるような代替空間の確保に努める。

4. 引き続き学生との間に、確約に基づいた話し合いを継続し、施設整備の推進は学生との合意に基づき行う。また、関係部局等との話し合いの仲介は、学生部が責任を持って行う。関係する情報については、常に迅速に公開する。
5. 将来の厚生補導担当副学長および学生部委員会、またはその職責を引継ぐ者に、以上の事項を責任を持って引き継ぐ。

・平17.7～17.8 学生部と B連との話し合いを2回開催

・平18.4～19.2 学生部と B連との話し合いを16回開催

この間の、B連との話し合いの概要は以下のとおり。

8/23 B連との合意に基づき課外活動施設と文化ホールを重点事業で要求

12/8 京都大学重点事業アクションプランで課外活動施設の予算措置するためB連と再度の合意を確認

2/19 課外活動施設案をB連に提示

・この他、B連に参加していない団体や東南アジア研究所の建替えに伴い移転する団体への説明を数回実施

今回の課外活動施設建替え合意は、大学関係者(学生部委員会第二小委員会・学生部)と学生とが多大の時間と労力を費やし、課外活動施設を充実すると共通の課題に真摯に取り組んだ結果である。



今後も、課外活動施設の完成までには、多くの点で学生と話し合いをする必要があると思慮されるが、大学と学生とがより良い合意点を見つけ、早期完成に向けて努力する姿勢を持ち続け、有意義な施設となることを願っている。

また、京都大学にとって重要な計画の一つである、「文化ホール(仮称)」については、今後も学生と協力し、実現に向けた努力が必要である。文化ホールの計画は予算の確保から始めることとなるが、大学の行事や文化系団体の活動拠点とし、また地域社会貢献の施設として早期の実現が求められる。現在、文化ホールが活動の拠点となる複数の音楽系団体が練習場として使用している学生集会所は明治44年の建物で、耐震性からも安全面に問題があることも考慮しなければならない。

大学としては、課外活動施設や文化ホール(仮称)は部室を有するサークルの為だけに建設するのではなく、全学公認団体全体の施設として位置づけて、多くの団体が利用できることを原則として考えている。

○2/19にB連に提示した施設概要案

3階建 4棟

1階建 1棟

(ルネの2階と廊下でつなぐ)

延床面積 3,366㎡

部屋数 22㎡ 92室

34㎡ 6室

合計 98室



4月3日に時計台前で開催された紅萌祭2007

## 大学の動き

### 副学長，機構長が発令される

西田吾郎副学長・高等教育研究推進機構長の退職に伴い，北村隆行工学研究科教授が4月1日付けで副学長・高等教育研究推進機構長に指名された。また，松重和美副学長・国際イノベーション機構長，横山俊夫副学長・国際交流推進機構長および大寫幸一郎環境安全保健機構長が4月1日付けで再指名された。

副学長の任期は平成20年9月30日まで，機構長の任期は平成21年3月31日まで。

#### ◆副学長(新任)

高等教育研究開発推進機構長(新任)



北村 隆行

#### ◆副学長(再任)

国際イノベーション機構長(再任)



松重 和美

#### ◆副学長(再任)

国際交流推進機構長(再任)



横山 俊夫

#### ◆環境安全保健機構長(再任)



大寫幸一郎

### 部局長の交替等 (新任)

#### 法学研究科長・法学部長

初宿正典法学研究科教授(法政理論専攻公法講座担当(憲法))が，森本 滋法学研究科長の後任として，4月1日付けで選出された。任期は平成21年3月31日まで。



#### 理学研究科長・理学部長

加藤重樹理学研究科教授(化学専攻理論化学講座担当(理論化学))が，北村雅夫理学研究科長の後任として，4月1日付けで選出された。任期は平成21年3月31日まで。



**農学研究科長・農学部長**

奥村正悟農学研究科教授(森林科学専攻生物材料工学講座担当(生物材料工学))が、矢澤進農学研究科長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成21年3月31日まで。

**人間・環境学研究科長**

堀智孝人間・環境学研究科教授(相関環境学専攻自然環境動態論講座担当(分析化学))が、富田博之人間・環境学研究科長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成21年3月31日まで。

**エネルギー理工学研究所長**

香山晃エネルギー理工学研究所教授(エネルギー機能変換研究部門複合機能変換過程研究分野担当(原子力・核融合工学))が、吉川潔エネルギー理工学研究所長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成21年3月31日まで。

**防災研究所長**

石原和弘防災研究所附属火山活動研究センター教授(火山噴火予知研究領域担当(火山学))が、河田恵昭防災研究所長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成21年3月31日まで。

**基礎物理学研究所長**

江口徹基礎物理学研究所教授(物理学基礎研究部門担当(素粒子論))が、九後太一基礎物理学研究所長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成21年3月31日まで。

**数理解析研究所長**

柏原正樹数理解析研究所教授(基礎数理研究部門担当(代数解析))が、高橋陽一郎数理解析研究所長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成21年3月31日まで。

**生態学研究センター長**

高林純示生態学研究センター教授(生態学研究部門担当(陸域生物相互作用分野))が、大串隆之生態学研究センター長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成21年3月31日まで。

**国際交流センター長**

森純一国際交流センター教授(短期留学部門・留学生指導部門担当(国際交流, 開発経済学))が、田村武国際交流センター長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成21年3月31日まで。



**総合博物館長**

山中一郎総合博物館教授(資料基礎調査系担当(考古学))が、中坊徹次総合博物館長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成21年3月31日まで。

**フィールド科学教育研究センター長**

白山義久フィールド科学教育研究センター教授(基礎海洋生物学部門担当(海洋生物学))が、田中 克フィールド科学教育研究センター長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成21年3月31日まで。

**こころの未来研究センター長**

吉川左紀子教育学研究科教授(教育認知心理学担当(認知心理学))が、4月1日付けで初代こころの未来研究センター長に選出された。任期は平成21年3月31日まで。

**カウンセリングセンター長**

青木健次カウンセリングセンター教授(相談心理学)が、岡田康伸カウンセリングセンター長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成21年3月31日まで。

**生命科学系キャリアパス形成ユニット長**

鍋島陽一医学研究科教授(医学専攻腫瘍生物学講座担当(腫瘍生物学))が、4月1日付けで初代生命科学系キャリアパス形成ユニット長に選出された。任期は平成21年3月31日まで。

**先端医工学研究ユニット長**

伊藤紳三郎工学研究科教授(高分子物性講座担当(高分子構造・光機能学))が、4月1日付けで初代先端医工学研究ユニット長に選出された。任期は平成21年3月31日まで。



(再任)

**教育学研究科長・教育学部長**

川崎良孝教育学研究科教授(教育科学専攻生涯教育学講座担当(図書館情報学))が、4月1日付けで教育学研究科長に再任された。任期は平成20年3月31日まで。

**生命科学研究科長**

西田栄介生命科学研究科教授(統合生命科学専攻多細胞体構築学講座担当(分子細胞生物学))が、4月1日付けで生命科学研究科長に再任された。任期は平成21年3月31日まで。

### 地球環境学堂長・地球環境学舎長

嘉門雅史地球環境学堂教授(地球親和技術学廊担当(環境地盤工学))が、4月1日付けで地球環境学堂長・地球環境学舎長に再任された。任期は平成21年3月31日まで。

### 人文科学研究所長

金文京人文科学研究所教授(文化構成研究部門担当(中国文学))が、4月1日付けで人文科学研究所長に再任された。任期は平成21年3月31日まで。

### 原子炉実験所長

代谷誠治原子炉実験所教授(原子力基礎工学研究部門担当(原子炉物理学))が、4月1日付けで原子炉実験所長に再任された。任期は平成21年3月31日まで。

### 環境保全センター長

大寫幸一郎工学研究科教授(材料化学専攻有機材料化学講座担当(有機合成化学))が、4月1日付けで環境保全センター長に再任された。任期は平成21年3月31日まで。

### 保健管理センター所長

川村孝保健管理センター教授(循環器病学)が、4月1日付けで保健管理センター所長に再任された。任期は平成21年3月31日まで。

### 身体障害学生相談室長

津田謹輔人間・環境学研究科教授(共生人間学専攻認知・行動科学講座担当(保健科学))が、4月1日付けで身体障害学生相談室長に再任された。任期は平成21年3月31日まで。

### 化学研究所長

江崎信芳化学研究所教授(環境物質化学研究系(分子微生物科学研究領域)担当(応用微生物学))が、4月1日付けで化学研究所長に再任された。任期は平成20年3月31日まで。

### 再生医科学研究所長

中辻憲夫再生医科学研究所教授(再生統御学研究部門担当(発生生物学))が、4月1日付けで再生医科学研究所長に再任された。任期は平成21年3月31日まで。

### 放射線生物研究センター長

小松賢志放射線生物研究センター教授(ゲノム動態研究部門担当(放射線生物学))が、4月1日付けで放射線生物研究センター長に再任された。任期は平成21年3月31日まで。

### 国際融合創造センター長

牧野圭祐エネルギー理工学研究所教授(エネルギー利用過程研究部門担当(バイオテクノロジー))が、4月1日付けで国際融合創造センター長に再任された。任期は平成21年3月31日まで。

### 埋蔵文化財研究センター長

上原真人文学研究科教授(歴史文化学専攻考古学講座担当(考古学))が、4月1日付けで埋蔵文化財研究センター長に再任された。任期は平成21年3月31日まで。

## 平成18年度第2回京都大学総長賞表彰式

学業、課外活動、各種社会活動において本学の名誉を高めた学生と学生団体を表彰する「京都大学総長賞」の平成18年度第2回表彰式が3月19日(月)午前10時から本部棟特別会議室で開催された。

今回は、学業5件・課外活動4件・社会活動3件、合計12件の推薦の内、選考の結果「学業3件、課外活動1件、合計4件」の個人・団体の受賞者が決定され、表彰されることとなった。

表彰状・記念品授与後、尾池和夫総長と受賞者の懇談が行われ、学業分野の受賞者である井手裕也さん・米田英嗣さん・北原鉄朗さんは、自身の研究分野を、また課外活動分野の受賞者であるKUBS京

都大学放送局はコンテストの優勝作品を映像で流すなど活動を紹介した。



(学生部)

| 分野   | 受賞者・団体名                                                                                                    | 概要                                                                                                                                                                                                                                       |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 学業   | 医学部5回生<br>井手 裕也                                                                                            | ・日本心臓財団発行の医学雑誌「心臓」に症例報告論文掲載(5人の学生が共同して行ったものであるが、特に筆頭著者の井手裕也君が中心的役割を果たす。)                                                                                                                                                                 |
|      | 教育学研究科教育科学専攻<br>博士後期課程3回生<br>米田 英嗣                                                                         | ・米国のMemory & Cognition誌へ論文掲載(筆頭著者)<br>・平成18年11月 日本心理学会優秀論文賞受賞(共著)<br>・研究室におけるeLearningプロジェクトや生理学研究所特別共同利用研究員として学外のプロジェクトへの積極的参加                                                                                                          |
|      | 情報学研究科知能情報学専攻<br>博士後期課程3回生<br>北原 鉄朗                                                                        | [論文]<br>・情報処理学会論文誌等に論文掲載(筆頭著者3件、共著3件)、英文論文掲載(筆頭著者3件)<br>[受賞歴]<br>・(社)情報処理学会第65,66回全国大会 学生奨励賞受賞、第67回全国大会 大会奨励賞受賞<br>・(財)電気通信普及財団テレコム技術学生賞受賞<br>・(社)日本音響学会関西支部第8回若手研究者交流研究発表会 若手研究奨励賞受賞<br>・I E E E 関西支部 第3回学生研究奨励賞受賞<br>・特許出願中2件、海外渡航助成5件 |
| 課外活動 | KUBS 京都大学放送局<br>経済学部3回生 橋本 淳央<br>〃 1回生 大成 安代<br>〃 2回生 岡本 雄輝<br>〃 2回生 岩波 泰佑<br>法学部2回生 小谷 高義<br>農学部3回生 遠山 雄大 | 第23回NHK全国大学放送コンテスト<br>映像CM部門 優勝<br>DJ部門 準優勝<br>音声CM部門 準優勝                                                                                                                                                                                |

## 部局の動き

## 「先端領域融合医学研究機構」終了シンポジウムを開催

3月6日(火)・7日(水)に医学部芝蘭会館稲盛ホールにおいて、「先端領域融合医学研究機構」の終了シンポジウムが開催された。

「先端領域融合医学研究機構」は、平成14年度に文部科学省・科学技術振興調整費の戦略的研究拠点育成プログラムの支援を受けて設置され、今日に至るまで先端医学、先進医療の研究を目的に新しい研究領域の創出、研究者の育成、先端医療技術の開発を推進し、社会との連携を目指して活動してきた。

本機構の一番の特徴は、若い研究者を公募によって特任助教授として迎え、独立した研究スペースとともに、設備と研究資金を提供し、自立かつ競争的環境において研究に専念させて優秀な研究者へと育成していくという、従来の講座制の仕組みを基本とする大学の人材育成システムを打ち破るというもので、新たな人材育成システムとして全国の大学の見本となったことにある。

終了シンポジウムでは、尾池和夫総長および成宮



稲盛ホールで開催された終了シンポジウム

周医学研究科長から、同機構の中核として研究に従事してきた若手研究者に対しての労い、機構運営に直接・間接に携わってきた研究者、関係者ならびに文部科学省および科学技術振興調整機構への謝辞が述べられた後、若手研究者22人による5年間の研究成果の発表が行われた。

(大学院医学研究科)

## 「京都からの提言：21世紀の日本を考える(第2回)」を開催

本学の17附置研究所・センターが主催するシンポジウム「京都からの提言：21世紀の日本を考える(第2回)」(読売新聞社後援)が、3月17日(土)大阪市のエル・おおさかで開催された。

このシンポジウムは、昨年の東京に続き2回目、本年がノーベル物理学賞受賞者の湯川秀樹博士、朝永振一郎博士の生誕百年にあたることから、両博士が拓いた世界「素粒子／中性子／ヒト／宇宙」をテーマとした講演と、両博士が社会活動や文化活動にも熱心にコミットされたことから、パネルディスカッションでは「科学技術立国と科学者の社会的責任」をテーマに取り上げた。

当日は、午前10時から、尾池和夫総長の挨拶にはじまり、九後太一基礎物理学研究所長による「湯川・



パネルディスカッションの様子

朝永両博士が残した宿題」、代谷誠治原子炉実験所長による「中性子利用が拓く科学技術、核物理からがん治療まで」、昼食をはさんで、松沢哲郎霊長類

研究所長による「チンパンジーを通して人類の起源に迫る」、松本 紘理事・副学長による「太陽系文明の曙光と宇宙エネルギー利用」の講演が行われ、早朝から会場を埋め尽くした600人を超える参加者は、熱心に聞き入っていた。

「科学技術立国と科学者の社会的責任」をテーマに金 文京人文科学研究所長をコーディネーターとして、引き続き行われたパネルディスカッションでは、会場から寄せられた多くの質問に各講師が答えた後、ゲストパネリストの土岐 博大阪大学核物理研究センター長、本多 宏読売新聞大阪本社編集局科学部長、パネリストの水野廣祐東南アジア研究所長がそれぞれの立場から、湯川・朝永両博士の諸活動を取り上げて意見を述べた。

最後に、コーディネーターの金所長が「未知の世界を探求する人々は地図を持たない旅人である」との湯川博士の言葉を引用しながら、「京都大学は、人の地図に頼らず自分たちで未知の世界を探求する基礎研究を行うことにより、人々がより安全に歩くことができる地図づくりに努める。また、エネルギー問題をはじめ、地球存亡の危機が切迫している今日、文理に跨る科学者集団が協力して正確な地図を社会に示すことが責務と考えている」とのまとめを行った。

なお、このシンポジウムは、今後も引き続き全国主要都市で開催していく予定である。

(原子炉実験所)

## 寄附講座，寄附研究部門の設置，更新

4月1日に大学院医学研究科，大学院農学研究科，大学院経営管理研究部，経済研究所に寄附講座，寄附研究部門が新設され，大学院経営管理研究部の寄附講座が更新された。今回設置されたのは，大学院医学研究科の「集学的がん診療学講座」のほか4寄附講座，研究部門で，また更新されたのは，大学院経営管理研究部の「ベンチャーキャピタル／プライベートエクイティ論(三菱UFJキャピタル)講座」である。概要は以下のとおりである。

### ●集学的がん診療学講座(新設)

- |          |                                                                                                                 |         |                                                                                                        |
|----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 部 局 名 | 大学院医学研究科                                                                                                        | 6. 担当教員 | 寄附講座准教授 三尾 直士                                                                                          |
| 2. 名 称   | 集学的がん診療学講座<br>(Department of Multidisciplinary<br>Cancer Management)                                            |         | 寄附講座助教 江副 康正                                                                                           |
|          |                                                                                                                 |         | 寄附講座助教 林 晶子                                                                                            |
| 3. 寄 附 者 | ブリストル・マイヤーズ株式会社，<br>株式会社ヤクルト本社，中外製薬株<br>式会社，ノバルティスファーマ株<br>式会社，アストラゼネカ株式会社，武<br>田薬品工業株式会社，日本新薬株<br>式会社，第一製薬株式会社 | 7. 研究目的 | ・学際的医学研究に基づくがんの新<br>規集学的治療法の開発<br>・診療科・診療部を横断した集学的<br>がん診療システムの研究<br>・がん専門医，がん医療専門職等<br>のがん診療エキスパートの育成 |
| 4. 寄附金額  | 総額2億円                                                                                                           | 8. 研究内容 | ・各種がんの個々の症例に対し，化<br>学療法，手術治療，放射線療法，<br>免疫療法などのうち，どのような                                                 |
| 5. 設置期間  | 平成19年4月1日～平成24年3月31日                                                                                            |         |                                                                                                        |

レジメン，治療法の組み合わせが最適で最良のアウトカムを来たしうるかを研究する。

- ・地域連携病院も組み込んだ，臓器別・治療フェイズ別のがん診療外来クリニカルパスの策定に向けた研究を実施する。
- ・院内がん登録および個人情報保護に配慮した転帰情報収集システムを確立し，それを基盤にして最適の

集学的治療法の開発を実施する。

- ・種々のがんの特徴，現在の診療システムの長所，短所を考慮し，今後の大学病院で実施すべき最適の集学的診療システムの形成に向けた研究を行う。

9. 研究課題
- ・各種がんの個々の症例に最適の集学的治療法の開発研究
  - ・主要がん毎の特徴に合わせた集学的診療システムの研究

## ●食と農の安全・倫理論講座(新設)

1. 部局名 大学院農学研究科
2. 名称 食と農の安全・倫理論講座  
(Food and Agriculture Ethics and Safety)
3. 寄附者 永井幸喜，株式会社ロック・フィールド，エスケー食品株式会社，株式会社明石菊水
4. 寄附金額 総額 6 千 6 百万円
5. 設置期間 平成19年 4 月 1 日～平成22年 3 月31日
6. 担当教員 寄附講座教員(准教授相当)  
細野ひろみ  
寄附講座教員(助教相当)  
工藤 春代
7. 研究目的 世界的な問題となっている食品安全や環境問題の解決に必要なとされながら，まだ未確立・未着手である科学ベースのリスク管理，倫理，ステークホルダー間のコミュニケーション研究を関連分野と協力して進め，その学問的基礎を固めるとともに実践的な手法の確立を目指し，若手人材を育成する。また，その成果により農学部・農学研究科全体のガバナンス教育に寄与する。

8. 研究内容 関連分野と共同して実施するプロジェクト研究において，科学的基礎による食の安全や環境問題の解決のためのリスク管理システム，先端科学技術を含んで拡大した農学研究を支える農学倫理，技術者倫理，農業・食品産業倫理の探求と確立，それらの基礎となる農学，食学(フードサイエンス)や農・食に関する農学研究者や市民，事業者，行政をはじめとする関係者の意思疎通・相互理解のための基礎研究と手法の確立を進める。

9. 研究課題
- ・食品由来のリスクの管理システムに関する研究
  - ・農学倫理，農業・食品産業倫理，技術者倫理の確立のための研究
  - ・リスクコミュニケーション，フードコミュニケーション，サイエンスコミュニケーションの考え方と手法に関する研究

## ●京セラ経営哲学寄附講座(新設)

- |                                                                                                                                                                                                                                                                                          |                                                                                                                                                                                                                             |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. 部 局 名 大学院経営管理研究部</p> <p>2. 名 称 京セラ経営哲学寄附講座(KYOCERA Chair of Management Philosophy)</p> <p>3. 寄 附 者 京セラ株式会社</p> <p>4. 寄附金額 総額 6 千万円</p> <p>5. 設置期間 平成19年 4 月 1 日～平成22年 3 月31日</p> <p>6. 担当教員 寄附講座教員(教授相当) 高 巖<br/>寄附講座助教 王 英燕</p> <p>7. 研究目的 経営哲学の体系化および企業倫理の理論的・実践的枠組みを形成すること。</p> | <p>8. 研究内容 経営哲学の体系化と下位体系としての企業倫理や企業理念を考え、応用倫理学としての情報倫理や環境倫理を取り込んだ枠組みを研究していく。</p> <p>9. 研究課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 経営哲学体系の構築</li> <li>・ 情報倫理・環境倫理の企業経営への適用</li> <li>・ 既存の経営学理論への経営哲学理論との接合</li> </ul> |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

## ●関西経済経営論(関西アーバン銀行)講座(新設)

- |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. 部 局 名 大学院経営管理研究部</p> <p>2. 名 称 関西経済経営論(関西アーバン銀行)講座<br/>(Kansai Urban Banking Corporation Chair of Kansai Economic and Management Research)</p> <p>3. 寄 附 者 株式会社関西アーバン銀行</p> <p>4. 寄附金額 総額 9 千万円</p> <p>5. 設置期間 平成19年 4 月 1 日～平成22年 3 月31日</p> <p>6. 担当教員 寄附講座教員(教授相当)<br/>塩沢 由典<br/>寄附講座准教授<br/>平成19年 8 月 1 日付け採用予定</p> <p>7. 研究目的 関西経済・産業・企業経営・ベンチャー企業創出育成に関する高度な研</p> | <p>究, その実務への応用研究および関連業界で活躍できる人材の教育を促進すること。</p> <p>8. 研究内容 関西経済圏における都市経済や産業のダイナミズムを, 企業経営やベンチャー企業創出育成の観点から, 理論的かつ体系的に考察し, その分析結果に基づいて関西企業経営論やベンチャー企業論を構築する。<br/>さらに, その研究成果を学部および大学院での教育に反映させる。</p> <p>9. 研究課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 関西経済圏における企業経営のダイナミズムの考察</li> <li>・ 関西経済圏におけるベンチャー企業の創出・育成・継承に関する研究</li> </ul> |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

## ●教育経済学寄附研究部門(新設)

- |                                                                                    |                                                                                                   |
|------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. 部 局 名 経済研究所</p> <p>2. 名 称 教育経済学寄附研究部門<br/>(Education Economics Division)</p> | <p>3. 寄 附 者 財団法人 日本漢字能力検定協会</p> <p>4. 寄附金額 総額 9 千万円</p> <p>5. 設置期間 平成19年 4 月 1 日～平成22年 3 月31日</p> |
|------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|

6. 担当教員 寄附研究部門教員(客員教授)  
平田 純一  
寄附研究部門教員(客員教授)  
吉野 直行  
寄附研究部門教員(客員教授)  
藤田 昌久  
寄附研究部門助教 木村 拓也
7. 研究目的 本研究部門では、複雑系経済研究センターと協力して、低迷する日本経済の活性化と新産業の創設をめざした人材育成に取り組む具体的な方法を経済学的立場から研究し、日本経済が国際競争の中で復活すべく貢献することを目的としている。
8. 研究内容 本研究部門は、教育の実態の調査と日本経済の将来に関わる基礎的また応用の研究を行うとともに、社会的に重要となっている技術力・経済力の向上に役立つ人材育成の経済学的研究を行う。
9. 研究課題 日本の企業価値の創造と資本市場の活性化に貢献できる応用研究を進め、その研究活動の一環として、国際的なシンポジウムや研究発表会などを行う。

### ●ベンチャーキャピタル／プライベートエクイティ論(三菱UFJキャピタル)講座(更新)

1. 部局名 大学院経営管理研究部
2. 名称 ベンチャーキャピタル／プライベートエクイティ論(三菱UFJキャピタル)講座  
(Mitsubishi UFJ Capital Chair of Venture Capital/Private Equity Management)
3. 寄附者 三菱UFJキャピタル株式会社
4. 寄附金額 総額4千万円
5. 設置期間 平成19年4月1日～平成21年3月31日  
(平成17年4月1日設置)
6. 担当教員 寄附講座教員(教授相当)  
濱田 康行  
寄附講座助教 片川 真実
7. 研究目的 ベンチャーキャピタルおよびプライベートエクイティとそれに関連する分野の高度な研究、その実務への応用研究および関連業界で活躍できる人材の教育を促進すること。
8. 研究内容 日本および欧米におけるベンチャーキャピタルおよびプライベートエクイティの行動的特質を理論的かつ体系的に考察し、その分析結果に基づいて日本およびアジア諸国で応用可能なベンチャーキャピタル／プライベートエクイティ論を構築する。  
さらに、その研究成果を学部および大学院での教育に反映させる。
9. 研究課題 ・ベンチャーキャピタルおよびプライベートエクイティの行動的特質の考察  
・ベンチャーキャピタルおよびプライベートエクイティの国際比較
10. その他 研究・教育活動をより進展させるため、寄附講座の名称を「ベンチャーキャピタル経営論(三菱UFJキャピタル)講座」から「ベンチャーキャピタル／プライベートエクイティ論(三菱UFJキャピタル)講座」に変更する。

## 寸言

## 世界で通用するトップブランド

秋山 咲恵

昭和62年、私は法学部を卒業し男女雇用機会均等法施行を背景に総合職一期生世代と呼ばれて社会に出て行った。それから7年後の平成6年、株式会社サキコーポレーションを創業した。パートナーは京大写真部の先輩で工学部出身の夫である。会社といってもたった2人、あったのはパソコンと電話と志だけだった。



現在当社はマシンビジョン技術を応用した産業用自動外観検査ロボットを開発し、PC・携帯電話・TV・車載機器等あらゆる電子回路基板を組み込んだ製品を生産する世界中の工場でお使いいただいている。業界でもトップクラスのシェアを獲得し、海外8カ国10拠点に現地社員を抱え20カ国以上に販売代理店を展開、売上の70%以上を海外で稼ぐグローバルビジネスを行う企業に成長した。

目指すのは「世界で通用するトップブランド」。単なる売上や市場シェアのみならず技術や品質や社員の仕事が世界中で信頼され期待され尊敬されるトップブランド企業を創りたいと志している。

駆け出しの小さな会社を率いて世界で各国の競合他社と戦う中であらためて感銘を受けたことがある。海外では日本のメーカーだということがすなわち「一流の品質」「高い技術力」と同義に理解されることが多い。これは、諸先輩方のこれまでの努力の成果であり、日本が品質や技術において世界のトップブランドであることの証である。

しかしながら同時に、急成長する中国市場の工場で現地の一流大学を卒業した若手技術者が英語を使いこなし、まぶしいくらいの向上心を漲らせて懸命に働く姿に触れて日本の同世代の大学卒業者との違いを痛感し、将来の危機感を感じずにはいられないところなのである。

21世紀に日本が世界のトップブランドであり続けるためには、例えば製造業の世界では「安く早く良いものをつくる」だけではもはや十分ではない。その土俵で戦うには数という強力な力を持った新しい

プレーヤーが続々と登場しているからである。品質や技術に裏打ちされた質の高い新しい価値を生み出しトップブランドとして輝ける新しい土俵を自ら創りだしてゆかなければならないと思う。

私自身の志はまだほんの一步を踏み出したに過ぎず、目の前に山積する課題と目まぐるしく変化するビジネス環境に包囲され途方にくれる毎日を過ごしている。しかし、幸いあきらめず挑戦し続ける強い気持ちを持つことができているのは、学生時代に定めた自分の原点があるからである。

好きなことを学び女性として幸せな人生を送れたらくらいの気持ちで文学部に入学した私だったが、多くの人や書物に触発され自分の世界観が広がるにつれ、社会で自分の可能性を思い切り試してみたいという気持ちが抑えきれなくなった。当時は女子学生の進路はとでも限られていて現在のように民間企業に総合職として採用されることは少なかったこともあり、教職や公務員でなければ司法試験などの資格を持ちプロフェッショナルとして仕事を続ける道を選ぶしかないように思われた。そんな気持ちを抱きながら進んだ専門課程で私の背中を押す出来事に出会った。学士入学をされてきた年配の方が、その昔法学部を卒業後、企業で勤め上げられた後に「自分は大学でやり残したことがある」との思いで文学部に再度入学されてこられたのだった。文学の勉強は少々遠回りすることになっても、まずは社会での可能性に挑戦してみよう。そんな気持ちになった。それでも既に3回生になっていた私にとって希望する法学部への転部は当時2回生からの受け入れということで卒業が2年も遅れることになるため、私にとっては大きな決断だった。その時の思いに立ち返る時はいつも苦しくても挑戦する道を進もうという勇気が湧いてくる。そしていつの日か「世界で通用するトップブランド」の夢を実現したいと思う。

学生時代の財産といえばもうひとつ。夫婦で始めた会社の社長に妻になることについて、既成概念に囚われず、周りの雑音にも耳を貸さず、合理的だと考えた夫の感覚は京大らしいといったら言い過ぎだろうか。

(あきやま さきえ 昭和62年法学部卒 株式会社サキコーポレーション代表取締役社長)

## 随想

## 技と楽しみ

名誉教授 上野 民夫

停年退官して6年が過ぎた。現在顧問を務める会社の好意で好きな研究を嗜める場所を提供していただいたにもかかわらず、最初の3年間は自分の手でゆっくり実験に取り組む余裕はなかった。しかしながら、この3年は大学院生のときと同様に週3日は終日実験台の前に立って天然有機化合物の単離と精製を楽しんでいる。

「何故いまさら実験を」と思われる方もおられるであろう。その理由は色々あるが、少年時代の環境と京都大学に奉職してからの体験に強い因果関係がある。先に言及しておくが、私は京都大学の近隣に生まれて、小・中学校、高等学校時代をその地で過ごして京都大学農学部に進学した。

終戦後の劣悪な食糧事情にもかかわらず幼少年期は楽しい思い出に満ちている。当時近隣の吉田や岡崎には多数の三高生や京大生が下宿しており、小・中学生の悪童にとっては課外活動のお兄様方であり師匠でもあった。旧学制から新学制への移行に続いて、朝鮮動乱の勃発によって岡崎地区は米軍の駐留基地と化した。教師・父兄・住民が一体となって初等教育の充実が図られたと記憶している。課外活動で教わった疎水での魚釣り、東山での昆虫・植物採集や図画の時間のスケッチ、これら幼少の体験は以後の人生を通して退官後の現在も体の中で生き続けている。

高校の頃から、生物学と化学に興味を覚えて進路の決定に迷ったが、生物と化学の両方が学べる所ということで農芸化学を選ぶことになった。当時は有機化合物が示す新しい機能が注目され、中でも天然



有機化合物の生理作用の探求は最も魅力的な研究領域に思えた。大学院に進学して有機化学の基本的な研究方法を教わることになり農業化学(現在の生物調節化学)研究室を専攻した。実験条件の選定はもとより、それを遂行する技と術、加えて考察を裏付ける観察力が如何に重要であるかを大学院に進学して初めて深く認識した。大学院修了後、ドイツでの留学生活を終えて、農学部グラウンドの南側にあった農業研究施設に助手として奉職することになった。菌類や昆虫と植物との寄生・共生関係を化学的に解明することを生涯の研究対象とすることにした。生物間の認識と応答は極微量の化学シグナルで支配されていることも多く、それらの研究は微量生体成分の純化と単離から始まる。その成否は技の研鑽にある。対象とする生命現象を再現する生物検定法を考案し、適切な精製法を駆使して活性成分を単離し、化学構造が解明できたときの喜びは直接実験に携わったものだけが味わえる感動である。

しかしながら、考案した生物検定に基づいて得られた活性物質は生理現象の一段面を再現するに過ぎない。自然界では生物の応答は一般には複合成分に対する個体内での多様な生理現象の総和として現れる。在職当時を思い返して、研究の視点が生理現象の一部の解明に偏っていたと反省して、現在は、植物から得られた活性物質に対する生物個体が示す動態の変化を経時的に考察することを心掛けている。スケッチで覚えた観察力と植物採集で培った勘とともに、研究者として体得した実験の技と術が現在の研究の基盤となっている。実験の効用は自然を少しでも多く知る楽しさにあるが、実験の計画、遂行と結果の考察には適正な思考力と判断力の向上、さらに体力の維持という楽しみもある。

(うえの たみお 元農学研究科教授 平成13年退官、専門は生物調節化学)

## 洛書

## 京都と京都大学に纏わる鼠の話

芹川 忠夫

「洛書」の「洛」は京都の異称、京都と京都大学に纏わる鼠の話をしよう。高齢の隠元禪師が、中国から黄檗山萬福寺に招かれた際(1654年)、黒目の白鼠(大黒天のつかわしめ、ダイコクネズミ)を慰みに持参されたという。これは普通に見かけるアルビノのラットではない。現存している全身白色で眼が黒色のラットと言えば、C-kit 遺伝子に突然変異をもつ Ws/Ws ラットである。これは、隠元のペットの末裔なのかも知れない。ただ、インゲンマメ(隠元豆)という言葉があるがごとく、高僧にあやかって話が伝わることもあるので、本当に隠元と鼠に関わりがあるのか調べてみた。すると、隠元は神秘的な鼠に出会ったことを「白鼠歌」(隠元全集に収録)として詠んでいた。隠元のペット鼠の話は、「珍翫鼠育艸(ちんがんそだてぐさ)」の「白鼠のはじまり」の章に記載されている。版元は、京都、堀川通高辻下町、銭屋長兵衛とある。この本には、いろいろな毛色をした鼠の作り方、すなわち、交配の方法が綴られた「鼠種取様秘伝」の章がある。天明7(1787)年出版である。メンデルの遺伝の法則(1865年発表)に相当するものではないが、その約80年も前の記述であるから驚く。これを初めて外国に紹介したのが、京都帝国大学理学部動物学教室の徳田御稔である(1935年、The Journal of Heredity)。徳田は鼠をマウスと訳している。しかし、正しくはラット及びマウスであり、主な記載はラットについてであると思われる。「養鼠玉のかけはし」(1781年出版)には、ペットショップの絵や鼠に芸をさせる見世物の図がある。また、鼠2匹と魚籠のようなケージを胸元に乗せて歩く芸者の浮世絵(五風亭(歌川)貞虎作)を見た。京の舞妓の振袖に、ブチ文様の鼠が糸車と遊ぶ図柄を発見した。本当に、京都には鼠を愛好する文化があったようだ。しかし、残念ながら、その前後の歴史が定かでない。



鼠に纏わる話や絵図等があれば、是非教えて頂きたい。

話が変わるが、哲学の道の中程から少し山手に入ると大豊神社がある。境内には小さな社がいくつかあり、その中に大國様の社がある。そして、狛犬ならぬ狛鼠が巻物と酒袋をそれぞれ持って左右に鎮座している。先代の神主がデザインされたものと聞く。鼠を使った研究の成果としてか、巻物が論文、酒袋の中には開発された薬が入っているという意味が込められているらしい。散策の折にでも寄られて確かめられるが良い。

最近の京都大学における鼠に纏わる話として、私たちが文部科学省の進めるナショナルバイオリソース事業のラットの中核機関を担っていることを記しておきたい。すでに、ヒト疾患のモデルラットを含めて370系統を超えるラットを収集した。系統ごとのゲノムプロファイルや特性に関するプロファイル調べて、データベースによる情報の発信や、ラット胚・配偶子の保存や個体復帰技術マニュアルのDVDを作成して配布した。遺伝子変異を持つラット精子バンクが新たに付加され、国内外の研究者へのラット系統の提供事業が軌道に乗り、ラットの国際的センターと認識されるようになった。一方、マウスについては、京都大学の多くの部局において多様な研究に数多く利用されていることは皆様ご存知のとおりである。このような状況は当面変わりそうにないように思える。

『鼠家にありて、善悪をしる。かならず鼠あつまるときは、近き吉事あり。子は干支の始まりにして、卦は即ち良なり。三百歳の寿を経て、人憑て年中の吉凶千里の外の事をしれり。今、又こぞつて鼠を翫ぶこと目出度、御代のしるしなりと、はしがきしてゆう。天明七ひつじの正月、定延子』、これは、「珍翫鼠育艸」の序であるが、マウスやラットを用いた研究活動の活発な京都大学のことを指しているように思える。ならば、京都大学の皆さんに、幸せがやって来る。

(せりかわ ただお 大学院医学研究科附属動物実験施設長・教授、専門は実験動物学)

## 話題

## Wood Science School および第69回生存圏シンポジウムを開催

2月26日(月)～27日(火)の2日間にわたり、生存圏研究所と本学の学術交流協定校であるインドネシア科学院(LIPI)との共催で、LIPI 生物材料研究センター(インドネシア・チビノン)において、インドネシアの若手研究者を対象に「Wood Science School」と題する現地講義を開催した。この現地講義は昨年引き続き2回目となる。

本学から7人、インドネシア側から3人の講師による講義は、木質科学に関する基礎研究から先端研究までの最新の研究テーマで、60人を超える受講者(若手研究者)の幅広い要望に応える内容となった。また、本学東南アジア研究所ジャカルタ事務所から駐在教員が出席し、同事務所の活動状況について紹介があった。

28日(水)には、LIPI 生命科学研究所において、第69回生存圏シンポジウム「Tropical Tree Biotechnology Initiative」を開催した。生存圏研究所から2人、インドネシア側から3人の様々な分野の研究者が、熱帯樹木バイオテクノロジーに関する講演を行った。インドネシア国内の各地域から100人を超える研究



オープニングセレモニーで挨拶する川井所長

者の参加があり、熱心な聴講と活発な質疑応答があり大変盛況であった。

今回、本学から、若手研究者である助手が数人参加し、海外での講義などを実地に経験することによって、国際的見地からの研究者としての資質向上を同時に達成できる成果があった。

(生存圏研究所)

## 第3回「TOKYO 漢籍 SEMINAR」を開催

人文科学研究所では、3月10日(土)、東京の学術総合センター中会議室において第3回「TOKYO 漢籍 SEMINAR」を開催した。

本セミナーの目的は、人文科学研究所が80年近くにわたって蓄積してきた中国学研究成果をわかりやすく紹介し、多くの人々に漢籍、ひいては漢字文化全般に関心を深めてもらおうとするものである。

森 時彦漢字情報研究センター長の開会挨拶に始まり、「陽關以西—漢籍資料から見た西方世界」をテーマに、高田時雄教授「大唐西域記の成立」、岩尾一史日本学術振興会特別研究員「唐蕃會盟碑への道」、稲葉 穰助教授「漢籍資料からみた唐代アフガニスタン」の3講師による講演が行われた。どの講演も興味深く、わかりやすく、おもしろかったという感想だけでなく、ほとんどの方が10時30分から16時までという長時間を熱心に聴講していた。

最後に行われた質疑応答も、時間切れで打ち切りとなるほどの多数の質問が寄せられ、また、来年のテーマを教えてほしいという要望が出されるなど、



講演する稲葉助教授

参加者の関心の高さがうかがわれた。

なお、本研究所では、2005年開催の第1回および2006年開催の第2回の報告資料集を、第4回「TOKYO 漢籍 SEMINAR」(2008年3月7日(金)開催予定)までに本年の秋から来年の春にかけて、順次刊行していく予定である。

(人文科学研究所)

## 「京都大学環境報告書2006」が環境配慮促進法特定事業者賞を受賞

環境省等が主催する「第10回環境コミュニケーション大賞」において、「京都大学環境報告書2006」が環境配慮促進法特定事業者賞を受賞し、3月26日(月)に表彰式が東京の日本教育会館一ツ橋ホールで行われた。

本大賞は、優れた環境報告書等を表彰することにより、事業者等の環境コミュニケーションへの取り組みを促進するとともに、その質の向上を図ることを目的として実施されている。

なお、本学の環境報告書に対する講評は、「環境負荷データについては、サイト毎の膨大なデータを収集・整理し、経年データとして取りまとめるとともに、一人当たりの使用量、排出量等に換算する等の工夫がされている。アスベスト対策や、排水の基準超過等に関する詳細な報告など、情報開示に対する真摯な姿勢が見受けられる。また、学内外の利害関係者からなるステークホルダー委員会を設置したことは高く評価できる。」であった。



日本教育会館一ツ橋ホールで行われた表彰式

「京都大学環境報告書」HP:

<http://www.kyoto-u.ac.jp/kankyo/report.html>

「第10回環境コミュニケーション大賞」HP:

[http://www.gef.or.jp/eco-com/10th\\_ecom\\_result.htm](http://www.gef.or.jp/eco-com/10th_ecom_result.htm)

(環境安全衛生部)

## 資料

### 平成18年度総長裁量経費による研究課題

平成18年度の総長裁量経費は、以下の36件が採択された。  
採択された研究課題および代表者等は次のとおりである。

| プロジェクト課題                                                                        | 代表者所属・職名・氏名                | プロジェクト関連部局                      |
|---------------------------------------------------------------------------------|----------------------------|---------------------------------|
| 学術定期刊行物「Psychologia - An International Journal of Psychology in the Orient」刊行補助 | 教育学研究科<br>教授 吉川左紀子         |                                 |
| 京都大学経済学研究科上海センター(現代中国経済研究)プロジェクト                                                | 経済学研究科<br>教授 山本裕美          | 経営管理研究部・<br>経済研究所等              |
| メディカルイメージングによる医学教育推進プロジェクト                                                      | 医学研究科<br>教授 成宮 周           |                                 |
| 災害時のチーム医療の構築                                                                    | 医学部(保健学科)<br>教授 笹田昌孝       | 病院・防災研                          |
| 京都大学フィールド映像アーカイブ・センターの設立準備                                                      | 人間・環境学研究科<br>教授 福井勝義       | フィールド研・AA科・農・<br>総博・東南研・生態研・理・文 |
| こころの未来に関する研究事業                                                                  | 人間・環境学研究科<br>教授 船橋新太郎      |                                 |
| 空間情報学を活用した地域研究における教育指導の高度情報化に関する研究                                              | アジア・アフリカ地域研究研究科<br>教授 平松幸三 |                                 |
| 公共政策専門教育内容の高度化および教育メソッドの開発調査                                                    | 公共政策連携研究部<br>教授 小野紀明       |                                 |
| 実践インターンシップまでを含めた一貫ケース教育プロセス構築プロジェクト                                             | 経営管理教育部<br>部長 吉田和男         |                                 |

| プロジェクト課題                                                                    | 代表者所属・職名・氏名              | プロジェクト関連部局                     |
|-----------------------------------------------------------------------------|--------------------------|--------------------------------|
| 東洋学に関する研究成果および研究資料の Web 上での公開                                               | 人文科学研究所<br>教授 岩井茂樹       |                                |
| 「透明電波吸収体」の応用展開                                                              | 生存圏研究所<br>助手 三谷友彦        | 化研                             |
| 熱帯人工林の環境貢献と持続的生産・利用                                                         | 生存圏研究所<br>教授 梅澤俊明        | 東南研・農・生存基盤・フィールド研              |
| 超多点フィールド計測システムの開発                                                           | 防災研究所<br>助教授 飯尾能久        | 人環・理                           |
| 西宮・湯川滞在型国際シンポジウム『生命とは何か？湯川のこれから100年の夢』開催に必要な科学研究費等を申請するための経費                | 基礎物理学研究所<br>助教授 村瀬雅俊     | 理・文・人文・人環・高等教育センター             |
| 数学文献の電子化技術手法の比較研究                                                           | 数理解析研究所<br>教授 高橋陽一郎      |                                |
| 発電用原子炉を対象とした改訂耐震設計指針の研究用原子炉への適用性評価                                          | 原子炉実験所<br>教授 釜江克宏        | 工・防災研                          |
| 熊取地区遠隔テレビ会議システムの構築                                                          | 原子炉実験所<br>教授 森本幸生        | 工・エネ科・理・農・医・学生部                |
| 京都大学国際シンポジウム「アフリカ大型類人猿の研究と保全」開催経費                                           | 霊長類研究所<br>所長 松沢哲郎        | 理・AA科                          |
| 京都大学附置研究所・センターシンポジウム開催経費                                                    | 霊長類研究所<br>所長 松沢哲郎        | 全附置研究所                         |
| 学内連携の推進によるバンコク・ジャカルタ海外研究拠点の強化                                               | 東南アジア研究所<br>所長 水野廣祐      | エネ科・情報・生存研・AA科・国際交流・地域研・農・生存基盤 |
| 学内で生産される各種論文、報告書等の研究成果物を電子化し、広く学内外に公表するシステム「学術情報リポジトリ」のコンテンツの充実と広報・宣伝活動を図る。 | 図書館機構附属図書館<br>教授 大西有三    | 全学対象                           |
| 電子媒体を活用した栄養教育システム開発・公開に係るプロジェクト                                             | 医学部附属病院<br>栄養管理室長 幣憲一郎   |                                |
| 大学コンソーシアム京都との遠隔講義による単位互換科目提供の試み                                             | 学術情報メディアセンター<br>教授 中村裕一  | 共通教育・学生部                       |
| 英国議会資料の整備と公開利用促進                                                            | 地域研究統合情報センター<br>教授 田中耕司  |                                |
| 日本におけるラテンアメリカ研究の学術交流ハブ形成のための萌芽的プログラム                                        | 地域研究統合情報センター<br>助教授 村上勇介 |                                |
| 学内の温暖化・循環対策事業の設計及び運用マニュアル・教材の作成                                             | 環境保全センター<br>センター長 大寫幸一郎  | 施設・環境部                         |
| 国際交流科目の実施                                                                   | 国際交流センター<br>センター長 田村 武   |                                |
| e-ラーニングによる日本語教育教材の開発・作成の応用展開及びOCWへの活用                                       | 国際交流センター<br>教授 森真理子      |                                |
| 総合博物館収蔵古文書・古地図の修復                                                           | 総合博物館<br>教授 中坊徹次         | 文・人環                           |
| 隔地キャンパス間における遠隔医療                                                            | 保健管理センター<br>教授 川村 孝      | 病院                             |
| 1910～50年代の京都大学における学生の諸活動についての基礎的調査・研究                                       | 大学文書館<br>館長 藤井譲治         |                                |
| 成績関係システムおよび授業支援システム等の開発〔全学共通教育教務情報システム(KULASIS)〕                            | 高等教育研究開発推進機構<br>機構長 西田吾郎 | 高等教育機構                         |
| 京都大学ジュニアキャンパス                                                               | 理事 東山紘久                  |                                |
| 京都大学シニアキャンパス                                                                | 理事 東山紘久                  |                                |
| 学生部危機対応計画策定の作成                                                              | 学生部委員会委員長<br>理事 東山紘久     |                                |
| OpenCourseWare(OCW)テストプロジェクト                                                | 理事 東山紘久                  | メディアセンター                       |

(財務部)

## 訃報

このたび、柴田<sup>しばた</sup> 徹<sup>とほる</sup> 名誉教授、横尾<sup>よこ</sup> 義貫<sup>およしつら</sup> 名誉教授、福留<sup>ふくとめ</sup> 秀雄<sup>ひでお</sup> 名誉教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介いたします。

## 柴田 徹 名誉教授



柴田 徹先生は、平成18年10月4日逝去された。享年74。

先生は、昭和29年京都大学工学部土木工学科を卒業され、大学院工学研究科博士課程修了後、工学部講師、防災研究所助教授を経て昭和42年防災研究所教授に就任、地盤災害研究部門を担当された。その後、平成2年に工学部教授に配置換え、土木工学科土質力学講座を担当、平成7年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和62年5月から2年間、防災研究所所長ならびに京都大学評議員として、大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、平成7年4月から同16年3月まで

福山大学工学部教授を務められた。

先生は土のレオロジー特性に関して先駆的な研究をされ、粘土材料のクリープ破壊や応力緩和等の時間依存性を示す力学挙動を統合的に記述し得るレオロジーモデルを世界に先駆けて提案され、地盤材料の構成式研究に多大な影響を与えた。また、地盤防災学の新たな展開、特に軟弱地盤防災および耐震地盤工学に関わる技術に関して指導的な役割を果たされ、その発展に多大の貢献をされるとともに、これらの分野において多くの人材を輩出した。主な著書に「埋立て軟弱地盤の防災」、「地盤の支持力」等がある。先生はまた、地盤工学会副会長、土木学会理事などの要職を歴任された。

(大学院工学研究科)

## 横尾 義貫 名誉教授



横尾義貫先生は、1月28日逝去された。享年92。

先生は、昭和14年京都大学工学部建築学科を卒業、工学部助教授を経て、同24年工学部土木工学教室教授に就任、その後昭和34年に建築学教室に配置換えとなり建築構造学講座を担当された。昭和52年に副学長として豊橋技術科学大学に転出され、同60年停年により退官、豊橋技術科学大学名誉教授の称号を受けられた。また昭和52年に京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和46年4月から同48年3月まで京都大学評議員として、大学の管理運営に貢献された。

退官後は、平成3年7月から同8年5月まで(財)日本建築総合試験所理事長を務められた。

先生は建築構造学、中でもシェル構造および基礎構造に関する研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、建築行政等の分野において多大の貢献をされた。主な著書(共著)に『構造力学：第I巻』(丸善)等がある。

また、日本建築学会、日本鋼構造協会、土質工学会などにおいて、会長、支部長等の要職を歴任された。これら一連の教育研究活動、学界活動により、日本建築学会賞および大賞を受賞されるとともに、昭和62年4月勲二等瑞宝章を受けられた。

(大学院工学研究科)

## 福留 秀雄 名誉教授



福留秀雄先生は、1月29日逝去された。享年73。

先生は、昭和30年京都大学理学部物理学科卒業、同32年大学院理学研究科を修了され、大阪府立大学助手を経

て、同34年7月京都大学基礎物理学研究所助教授、同36年3月京都大学理学博士の学位を取得され、同41年1月理学部助教授、同62年5月教授に就任された。平成9年3月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生は素粒子論から情報理論、生物物理学、群論、量子化学、固体物理学にわたる広い学識を持たれ、すぐれた研究業績を挙げるとともに多様な分野への人材の育成に貢献された。

生物物理学の業績としては転移RNAおよびリボソームの紫外線照射による失活の研究やアクリジンオレンジの結合によるリボソーム状態の研究が挙げられる。またマグネシウムジャンプによるプロトンの放出の研究で大小亜粒子間にプロトン放出の差があることを発見された。先生は物理学教室における最初の生物物理研究部門を担当され、多くのすぐれた生物物理学と分子生物学の研究者を育成された。

量子化学の業績として、多電子系の電子状態を求

めるための基礎的な方程式であるハートリー・フォック方程式の解が、系の対称性の群の部分群によって分類できることを示された。それによって化学反応の過程で質的に異なる多様な電子状態を取ること示された。

低電子系、原子核の核子系におけるフェルミオン系の状態を記述する方法として共鳴ハートリー・フォック法を開発された。それは多フェルミオンの状態を多様なハートリー・フォック状態の重ね合わせとして記述するものである。それにより1次元分子、高スピン分子における電子相関の性格を解明された。

またポリアセチレン系の電子状態の研究では異なるサイト間のクーロン相互作用の役割がNMRやXPSの異常性を説明する上で重要であることを示された。特にクーロン相互作用によりポリアセチレンのソリトンが電子格子結合のみの場合の振幅ソリトンから近似的な純位相ソリトンに変わることを示された。

上述の研究は国際的にも高く評価され、国際会議で招待講演を行うとともに量子化学の欧文誌の編集や国際的な物理化学グループの設立に貢献された。

(大学院理学研究科)

## 日誌 2007.2.1 ~ 2.28

- |                         |                       |
|-------------------------|-----------------------|
| 2月2日 経営協議会              | 14日 企画委員会             |
| 5日 役員会                  | 16日 図書館協議会            |
| 〃 キャンパスミーティング(地球環境学堂)   | 19日 役員会               |
| 6日 総長ランチミーティング(生命科学研究所) | 20日 教育研究評議会           |
| 〃 企画委員会                 | 〃 大学評価委員会             |
| 9日 学生部委員会               | 21日 国際交流委員会           |
| 13日 役員会                 | 22日 全学共通教育システム委員会     |
| 〃 部局長会議                 | 25日 入学試験(前期日程)(27日まで) |
| 〃 保健衛生委員会               | 26日 役員会               |

## お知らせ

文部科学省特定領域研究「持続可能な発展の重層的環境ガバナンス」  
第1回国際シンポジウム「持続可能な発展のための民主主義」  
(Democracy for the Sustainable Future)

1. 日 時：5月18日(金)～5月20日(日)
2. 場 所：大学院人間・環境学研究科地下大会議室
3. プログラム：
  - 5月18日(金)
    - 13:00-14:15  
開会の挨拶：植田和弘  
基調講演：イエヘッケル・ドロア(イスラエル ヘブライ大学)  
「持続可能な未来に向けた民主主義の再設計」  
(Redesigning Democracy To Take Care of the Future)
    - 14:30-18:00 セッション1 (途中で15分間の休憩)  
持続可能な発展のための環境ガバナンスを支える民主主義の理念と実践  
(Theories and Practices of Democracy for the Environmental Governance)
    - 18:30-20:30 レセプション
  - 5月19日(土)
    - 9:00-12:30 セッション2 (途中で15分間の休憩)  
中国における環境ガバナンスの現状と課題(Environmental Governance in China)
    - 14:30-18:00 セッション3 (途中で15分間の休憩)  
環境ガバナンスにおける非政府セクターの役割  
(Roles of Non-governmental Sectors for the Environmental Governance)
  - 5月20日(日)
    - 9:00-12:30 セッション4 (途中で15分間の休憩)  
重層的環境ガバナンスの理論と実践  
(Theories and Practices of Multi-level Environmental Governance)
    - 14:30-16:30 総括討論(司会：足立幸男)  
閉会の挨拶 足立幸男
4. 定 員：200名(申し込みによる先着順)
5. 受 講 料：無料(同時通訳付き)
6. 申 込 方 法：本シンポジウムへの参加を希望される方は、名前、住所、電話番号とともに、「国際シンポジウム参加希望」と明記のうえ、下記の間合せ先までE-mail またはFAX にてお申し込みください。
7. 問い合わせ先：〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町  
京都大学大学院人間・環境学研究科 足立研究室  
TEL & FAX：075-753-2896 E-mail：ynakamura@z06.mbox.media.kyoto-u.ac.jp  
【URL】<http://www.sdgovernance.org>

## 隔地施設 紹介



### 農学研究科附属牧場



附属牧場全景

附属牧場は、農学部から北西約55kmの京都府船井郡京丹波町にあり、和牛を中心として約160頭の牛を飼育し、これらを用いて肉用牛の飼養管理なかでも牛肉生産に関する基礎的・応用的研究を行うとともに、教育面では約30名が収容可能な研修・宿泊施設を利用して、学部学生に実習教育を実施しています。

**沿革** 1953(昭和28)年11月に京都学芸大学(現京都教育大学)高原分教場の施設の一部を共同利用して試験研究が始まりました。1960(昭和35)年7月に土地建物が本学に移管され、京都大学高原畜産試験地として畜産学の教育・研究の場としての活用を開始し、1974(昭和49)年4月に農学部附属牧場となり、1998(平成10)年4月に農学研究科附属牧場に改組して現在に至っています。

**施設と肉用牛飼養** 附属牧場は、1979(昭和54)年3月に本館管理棟と繁殖育成牛舎を、1981(昭和56)年6月に枝肉解体施設棟、肥育牛舎、大農具庫などを設置するとともに、粗飼料の生産基盤の圃場を拡充しました。1996(平成8)年3月には堆肥処理場を整備し、大型タワーサイロを用いたサイレージ(乳酸発酵させたエサ)の貯蔵・利用から、ロールベール方式に切り換え、生産・管理コストの削減を図りました(1997年3月)。

最近10年間の飼養頭数、子牛生産および売り払い頭数(年間)の平均はそれぞれ141頭、39頭および42頭で、近年では産肉能力の高い雌牛を増頭しつつ、飼養規模の適正化、飼養管理の効率化を目指しています。約10haの草地でイタリアンライグラスとスーダングラスの牧草を生産し、教職員総出のみごとな作業連携で年4回サイレージを調製し、ロール数で約1,500本、重量にしてほぼ260トンを取獲して、繁殖牛と育成牛に自給粗飼料として給与しています。また繁殖・肥育一貫体制により、肉用牛の飼養管理を行うなかで、家畜人工授精師資格を取得している5名の(うち1名は女性)職員が約70頭の繁殖牛の人工授精を行っています。繁殖成績の一層の向上ならび



スーダングラスの人力集草



実習で牛の見方を学ぶ

に受精卵の回収や受精卵移植技術の取得にもチャレンジしながら技術の高度化を図っています。

**教育と研究** 教育面では、2回生には肉用牛の繁殖・育成・肥育に関する飼養管理技術と牧草の生産・貯蔵・利用技術の修得を中心とした実習教育を、また4回生には農学研究科の関連研究分野と連携して、育種、繁殖、栄養、生理および生産システムなどに関する講義と実習をそれぞれ1週間泊り込みで行っています。

研究面では、試験研究が開始された1953(昭和28)年当時は、和牛



が役畜としての役割を次第に耕耘機にとって代われつつあったことから、役肉用牛を早急に肉用牛に転換する必要に迫られていました。そこでいわゆる若齢肥育の可能性と合理性を実証するために数多くの肥育試験をほぼ20年間継続して実施し、若齢肥育の技術が確立されました。1960年代半ば頃から若齢肥育が関西の農家を中心に普及し始め、その後全国に広がることによって、新たな産業としての肥育産業がわが国に定着することになりました。1974(昭和49)年の附属牧場の設置を機に、試験研究は肥育技術の開発研究からより基礎的な研究にシフトし、産肉生理学的なアプローチにより肥育牛の産肉能力ならびに交雑種利用による牛肉生産システムなどについて多くの成果が明らかにされました。その後の肉用牛飼養をめぐる環境の変化・流動化による地域資源の有効利用、環境負荷の軽減、循環型社会の構築など多様な社会の要請に的確に対応するために、近年では農学研究科ならびに他研究科の関連研究分野、さらには学外の研究機関との連携を図りながら試験研究にとり組んでいます。具体的な課題としては、肉用牛の機能開発に関する基礎的研究、未利用資源の開発と環境負荷軽減に関する研究および肉用牛の飼養管理の改善に関する研究などがあげられます。

### 職員構成

教員2名(うち1名は牧場長、兼任)、  
技術専門職員3名、技術職員3名、  
外国人特別研究員(JSPS)1名、  
受託研究員1名



児童による牧場見学



放送大学の授業風景

**社会連携活動** 附属牧場が肉用牛生産に関する研究教育の場としてのみならず、地元京丹波町が京都府内で屈指の肉用牛および酪農地帯であること、京都市からもそう遠くないという立地条件などから、近年では肉用牛飼養農家、農業団体をはじめとして小学校(夏休み体験学習)、一般の方々の附属牧場への施設見学のための来場が増えています。また草地を利用したNPO法人による救助・警察犬の調教訓練が行われることや、宿泊施設を利用した放送大学の面接授業ならびに小規模の学会セミナーも企画されています。さらには地

域の産業振興や学校教育のなかでの食育に関連した活動など、積極的な社会連携への取り組みの推進を図っています。

最後に、近くに丹波連山を望みながら、構内で展開される四季折々の光景のすばらしさについても触れておきたい。

(附属牧場)

〒622-0203 京都府船井郡京丹波町  
富田蒲生野144-1

電話 0771-82-0047

Fax 0771-82-1215

<http://www.kais.kyoto-u.ac.jp/j/modules/tinycontent5/index.php?id=15>

附属牧場へのアクセス

- ・JR嵯峨野線 園部駅からJRバス園福線で京丹波町役場前下車、国道27号線を北に徒歩10分(JR京都駅から約80分)
- ・京都縦貫自動車道終点(丹波IC)から自動車で国道9号線、27号線経由10分(農学部から約90分)